
笑わぬ理由は思案中

天守閣の屋根裏のアレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑わぬ理由は思案中

【Zコード】

Z8712Y

【作者名】

天守閣の屋根裏のアレ

【あらすじ】

銀色に髪を染め（染められ）、無表情を崩さずあまり笑わないことから、数少ない友人達以外からは不良と思われている御笠木縁。その友人からでさえ、何故笑わないのかと問い合わせられる始末。彼は、依存することが大嫌いであり、したくもない仕事をしている自分に一種の自己嫌悪を覚えていた。

ある日、学校からの帰宅途中、ある理由によっていつもとは違う道を通つて家に帰ろうとした。しかし、そこで予想外の出来事が。その選択によって、彼の陰鬱な日常生活は徐々に変わることになる。

複雑な過去を抱える少年とその友人、そしてある少女達による『メ
ディ&バトルの物語』

プロローグ＆第一話・帰宅の狭間で（前書き）

初投稿作品です。未熟で拙い文章ですが、読んでいただけたらとても嬉しいです。

プロローグ&第一話・帰宅の狭間で

「お前さ、一度でも心の底から笑つたことがあるか?」

友人である貴寅たかとひから言われた一言は、縁ゆかりの脳裏に焼き付いて離れようとはしなかった。

縁と貴寅は、無二の親友である。一人は、歯に衣着せない指摘をし、いつも喧嘩腰に近い口調で討論をしていた。

「……それはどういつ意味だ貴寅?」

「言つたとおりだよ。お前、いつも愛想笑いは浮かべるが、眼の奥は全然、微塵も笑つていよいよ見える。うん、てか、絶対に笑つてない」

「へえ、お前は目を見ただけで人の感情を汲み取れるとでもいうのか?意外な特技をお持ちのようだ、友人として感悦の極みだよ」

「茶化すなよ縁。俺の目に狂いはないぜ。それに、俺は真面目に聞いてるんだ。答えてもらおうか。何故、お前はいつも笑わない?何故、いつもそんな冷めた表情をしている?」

「……それは」

「まあ、分かつたら教えてくれ。色々と力になれることがあると思うからな」

「……」

貴寅の、緩いながらも確信をついた追及に、縁は咄嗟に応える」とが出来なかつた。

何にも縛られず、何にも頼らず、自分の好きなように、他人に時間を割くことなく、自分の人生を過ごす。つまりは、依存をせず普通に能能と日常生活を送る」ことができる「この」なら、それはなんと素晴らしいことであろう。

例え、他人に依存をしていたとしても、依存しているという事実に嫌悪感を感じない心を持つことが出来れば、幾分か精神的ストレスが和らぐことは確かだ。

しかしながら、依存などしたくはなくとも依存せざるを得なければならない、という事実と無力感が付きまとった場合、「この」思案は水泡と化す。

そんな、時間潰しにもならない思考を、高校2年生の御笠木縁は眞剣に続けていた。

彼は、学生の身分でありながら、社会的に警められるわけでもない仕事に手を染めていた自分が嫌だった。

奨学金で補えない学費を出す代わりに、有事の際にいつでも仕事にとりかかるねばならない、といつ爵さちになりそつた労働条件の下での勤務をしている縁。

更に悪いことに、縁の通う私立高校は、仕事どころかバイトすら厳禁であり、その厳格さは他の高校に類を見ないものである。例を出すならば、もしバイトをしているということが発覚しようものなら、バイトを辞めるか学校を辞めるか選べ、という二者択一の

選択をその場で求められる程の規律の厳しさなのである。

他にも、この学校は一部の上流の生徒を優遇するなど、変わった取り決めをしており、他校からは通称クレイジー・ハイスクールと呼ばれていた。

当然、縁は学校に仕事をしていることがバレンタインに振舞わなければいけないので、自然と神経を尖らすこととなり、疲労は蓄積する一方であった。

仕事をしなければ学校に行けないのに、学校は仕事をすることを禁じているというジレンマが、縁にとって、苦痛とも取れる心労となつていてるのである。

その度合いと言つなれば、好きでもないのに髪を銀色に染めさせられたというトラウマと双璧をなす程である。

縁が通う学校は、あまり校則が緩い方ではなく、というかむしろ厳しく、その髪は何度も教師に注意され、一度頼みの綱である奨学金を取り消されかけたこともあります。縁は非常にこの髪及び縁に髪を染めるよう脅迫した銀髪フェチ雇用主を恨んでいた。

そんな縁は、本日も化学の授業中に銀髪を指摘され、目を付けられてしまっていた。

こうして今日も今日とて、理不尽な雇用主への恨みは再燃するのであつた。

「この髪……この髪さえ直せればなあ……」

独り言を呟いて帰途につく縁の足取りは重かつた。

最近、風紀委員からの視線が痛いので、いい加減この髪を直したいと思っている。

いや、二十四時間四六時中直したいとは思っているのだが、学費と一部の生活費を出してくれているという形の雇用主が「直しちゃダメ

「メ」と言つてゐる以上、従わない訳にはいかないのである。

いつになつたら俺の髪は黒色に戻るんだ」「と沈んだ気分の縁。

こういう時は家に帰つて寝るのが一番、と帰宅の足を急がせた。

しかし、いつもの帰宅コースでツナギを来た中年男性らが道路の舗装をしていた。

周辺に響く、重機の音。

「まじかよ・・面倒くさ」

こういう大掛かりな工事は年末にまとめてするんじゃないのか、今は5月だぞ5月、と縁は心中で不平を言つた。

すると、誘導員らしき人が、立ち止まつて、この縁に声をかけてきた。

「兄ちゃん、いつもこの道路使つてるの？」

ヘルメットをかぶつた中年男性は、無駄ににこやかな笑顔である。

「はあ・・・まあ。それはいいとして、今の時期に舗装工事ですか」「悪いねえ、こここの工事、年末にやる予定だつたんだけど、日程が延びに延びちやつてね。5ヶ月遅れの舗装工事つてわけだ、ははは。

「そうですか、それじゃあしうがないですね。」

「いやいや兄ちゃん、おじさんたち結構頑張つてやつてるからね、人ひとり通れるスペースならあと20分くらいで開通すると思つよ？」

親指立て、渾身のドヤ顔である。いらぬえよそんなサービス。それに、20分も待つてゐる間には、他の道から帰るほうが絶対に早い。

「まあ、少し歩きたい気分なので、違つ道行きます。」

そう言つて、縁は誘導員に背を向けて歩を出した。

「あじよ、そうだ兄ちゃん。おじさん」いらぐんでよく道路工事やつてるから、見つけたら気兼ねなく声かけてくれよな

当然、見かけたとしても声なんてかける予定などないが、爽快な喋り方の中年男性だったので、話して少し嫌な緊張が楽になった、と縁は少し軽くなつた足取りで、隣の道に入った。

しかし、縁は気づいていなかつた。緊張と共に、普段は持ち合わせているはずの警戒心も共に緩んでしまつたことに。

縁が入つた道は、家からの最短ルートである。

しかし、普段縁はこの道を使つていない。

なぜならば、ここは人通りが少なく、電灯も切れているので不良の格好の溜まり場と化しているからである。

正直、こここの道は使いたくないのだが、いつもの道にこやかおじさんがいたのであつては、こここの道を使わざるを得ない。あまり長居したくない道なので、縁は歩を急がせる。

今日は、思ったより不良がおらず、快適に通行できるな嬉しいなと思つていた縁であったが、あにはからんや、道の中ほどでトラブルが起きた。

薄暗くてよく見えないが、10歩ほど先で、誰かが口論をしていたのだ。

道の半ばまで来て引き返すのは体力を浪費した氣分が否めないので、どうしたものかと縁は考えた。

よく聞いて判断するに、4人の不良が不愉快な笑い声で誰かに絡んでいるらしい。

一般人同士の口論であれば待機するつもりでいたのだが、そういうえばここは不良の往来。

血なまぐさい展開になる可能性もあることを考へると、この周辺に居ないほうがいいかと思い、さあ巻き込まれる前に引き返そうと思つた縁だが、

「ちょっと・・・もう・・・困ります・・・」

と女性が涙ぐんだ声で不良に反論している声を聞いて、引き返す足を止めた。

その声は、聞いた事こそないものの、とても透明感あふれる可愛らしい声で、遠くから聞こえる重機の音や不良の聞くに堪えない幼稚な笑い声を押しのけ、縁の耳の奥に届いた。

しかし、大声を出してもこの道では意味が無い。それがわかっていてあの不良たちはその女性に絡んでいるのだろう。

それを思つと、縁は沸々と怒りが湧いてきた。珍しいことである。普段のことであれば、他人がどうなるうと知つた事ではない縁だが、今回だけは不思議と素直に感情が沸き上がってきた。それも、怒りという、感情。

こんな愛らしい声の持ち主を泣かせる男がいていいのか？一体全體なんの権利があつてそのようなことをしているのだ、と。

そこで、縁の脳裏に、ある考えが思い浮かぶ。

ただし、実行するに伴い、ある程度のリスクが発生するものである。そうそう気軽に行動したくはないのだが、あの声の持ち主をこれ以上怖がらせてはいけない、といつ謎の義務感のほうが勝る。

「正直、あんまり関わりたくないんだけどな・・・問題起こしたら洒落じやなく退学になりそだし」

そつ毒づきながらも、縁は自分の意志で声の発生源である暗闇に
歩踏み込んだ。

プロローグ&第一話・帰宅の狭間で（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

この話を読んで、もう少し書き加ねつつ思つてみた方は、次
話に『期待ください』。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8712y/>

笑わぬ理由は思案中

2011年11月26日20時50分発行